



TITLE:

天文用語に関する私見(5):特に野
尻氏の文に答へて(i)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 天文用語に関する私見(5):特に野尻氏の文に答へて(i). 天界
1935, 15(171): 326-329

ISSUE DATE:

1935-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167054>

RIGHT:

げ込む非禮を許されれば、星名の $\alpha, \beta, \gamma, \delta, \dots$ を思ひ切つてその儘の發音で使用し、紛はしい「ア星」「ガ星」を止めて戴きたいのである。大多數の會員諸氏は英語を讀まれる人々で、従つてこの alphabet とその發音を覺えることはさして困難ではない。代數の本でもその一端は教へられる。最初から一氣に覺えてしまふ方が星圖を見るにも二重の手數が省ける。且つ「ア」「ガ」等々の片假名は活字の間に混ると、ゴシックでもない限り、印象が弱いし、誤植をも免れ難いと思ふのである。妄言多罪。(4.21)

天文用語に關する私見 (5)

(特に野尻氏の文に答へて——i)

山 本 一 清

近來、天文々學界に活躍せられる野尻氏の星座の名について愚見に對する御高説は、かねてから大に期待してゐた所である。従つて、別頁の如き同氏の玉稿については敬意を以つて讀んだ。さすがに老練家であるため、自分の如き者の眞意をよく了解せられ、多くの點に於いて、同意して下さるのを嬉しく思ふ次第である。

氏の御意見を拜見して見ると、Hydra を「ヒドラ」、Hydrus を「みづへび」に御同意して下さるのは喜ばしい。

Pegasus は、愚見によれば、神馬「ペガス」であつて、「神馬ペガス」では勿論ない。即ち“神馬”は説明語である。我が日本語には時々このやうな説明語の必要を感じる。何となれば、單にカタカナだけでは、人名だか、地名だか、又は其他の特種な言葉だか、判明しない（殊に、歐米と全く異なつた歴史や人情や、風習や傳統を持つてゐる我が日本人にとつては）ため、第一印象の混亂する場合が多いから。

さて、又、“翼馬”も“天馬”も誠に結構である。殊に之れ等とまぎらはいし他のものが全天には存在しないのだから。しかし、考へて見ると、少々此等の漢語はぎようぎようしいではあるまいか？ 自分は、英獨佛西伊の如き歐米の主要文化國が共通の綴りで用ゐてゐる言葉ならば、日本語に於いても、わざわざ邦語化しないで、むしろ洋語の臭ひのするカタカナのまゝで置いた方が好いではないかと、平生から考へてゐる。Cassiopeia を支那人のやうに“仙后”としないで「カシオペヤ」のまゝにしたり、Hercules を支那風に“武仙”としないで「ヘルクレス」のまゝにしたりする意味の一部は此の點にある。だから、“翼馬”や“天馬”や“神馬”としないで、「ペガス」を自分は主張するのである。

更に一言するに、「ペガス」を自分は好まない。何となれば、スだの、又はクだの、ムだの、ルだのと言つたやうな文字は、洋語から邦語に譯した文の中に於いて、必ずしも su とか、ku とか、mu とか、ru とかの如き子音と母音との合併した場合でなく、時々には單に s, k, m, r の如き、母音を持たない子音の代りにも用ゐられる。従つて、「ペガス」の中の第一のスは su であり、第二のスは單に s であるといふことを區別することが、出来れば望ましいと思ふ。——或る人々は之れを「ペガサス」と書く。此頃、賣り出したガソリンも“ペガサス”である。しかし、之れも自分は好まない。短音の u をア行のカタカナで置き代へる習慣については、自分は敢へて現代の日本人英文學者に反省を促したいと思ふ。自分は、かつて、若かりし頃、一米人天文學者との會話中に、sun を“サン”と（繰り返し）發音して見て、どうしても通じなかつた経験を思ひ起す。其の時は、遂に紙上に SUN と書いて見て正解して貰つた。無論、日本人である自分の發音の未熟であつたことが此のトラブルの主因であらう。しかし、試みに思へ、話し相手は彼我共に天文學者なのだ！ 英語を話す二人の天文學者が、二三十分も打ち解けて會話する途中に、“サン”と言つたがために、行きつまつたとは!! 勿論、多くの日本人が發音する“サン”は、むしろ son に近いものであることは判つてゐる。故に、自分が“サン”と言つた時に、相手が『其れは son の意味だろうか?』と一應考へて見ただらうことは想像される。しかし、之れを son と解釋すれ

ば、context と合はないことは直ぐに背かれる筈である。故に、自分の相手は、斷然、sun と解釋しないで、むしろ『何の意味だか？』と疑つたのである！

とにかく、sun を“サン”と日本人が發音することが大間違ひなのだ。ついては、理屈を後に譲つて、萬事、耳で學問する開港地あたりの車夫馬丁の英語を聞け！彼等は cup をコツプ、tunnel をトンネル、pump をポンプ、truck をトロッコ、又はトロ、等々々と發音してゐる。之れで、彼等は不自由なく會話してゐるのである。故に、sun だつて、“サン”と言はないで、敢へて“ソン”と發音した方が、外人には通するのである。現に自分は、あの事あつて以來、決して sun を“サン”と言はず、丁寧に“ソン”と發音してゐる。そして、一度も聞き返されたことが無い。

又、英語の u の短音は歐大陸語で o に相當する場合が、少なくない。英語の sun は、ドイツ語で Sonne である。

要するに、u の短音は、むしろ日本語の オ行に近い。故に Pegasus の場合にも、最終字の s まで生かすつもりならば、よろしく「ペガソス」とするのが好いと思ふ。同じ流義に、固有名についても、Aristarchus は「アリスタルカス」ではなくて、「アリスタルコス」と言つた方が眞に近く、又、實に *Αρισταρχος* といふギリシヤ原語にも近い。

しかし、自分は再び Pegasus の元に戻つて、-us は男性語尾なのだから正確には“男のペガス”と言ふべきであるけれど、幸か不幸か、日本語には性別は無いのが本格的であるから、“男の”を省いて、單に「ペガス」とすることを主張するのである。

Crater を“カツプ”と譯することが不可である一其の理由は、たまたま上にも詳しく述べた原理によつて明らかであらう。即ち、ラテン語“Crater”を英語“cup”に相當するものとしやう。しかる場合に、cup をカタカナ日本語で置き換へるには、かの尊敬すべき車夫馬丁諸君に習つて「コツプ」とするこそ正しいのであつて、決して“カツプ”とすべきではない。論者は或は“今は既にカツプが立派な日本語になつて了つてゐるのだ”と言はれるかも知れない。それならば、“コツプ”だつて既によほど以前から立派な日本語ではないか！ 所謂“カツプ”と“コツプ”と、共に其の原語が英語の cup

である!! 一體、こんな滑稽なものになつて了つたのは、眞の日本語を知らず、愛せず、デタラメに新語を作つて、少しも其の前後善惡の判斷を顧みない“モダン・ボーイ”たちの無反省によるものであるが、しかし、自分をして言はしむれば、こんな無差別、無統制に、すべてを混亂のまゝに、冷笑して顧みない英文學者の無責任や非愛語的、非愛國的な日常の態度によるとしなければならぬ。

一體に今日の國語學者も英語學者も、我が日本語の成長や進歩や、將來のことについては少しも考へてゐないらしい。近年、殊にひどく日本語が壞れて行く事實を目前に見ながら、全く之れを默視して、顧みない無責任さには、自分は平生から憤慨してゐる。Science を明治初代の先輩たちは“理學”と譯した。そしてひろく之れは今も權威者に用ゐられてゐる。しかるに、何も知らない若僧たちが、誰にも無斷で、“科學”といふ新譯語を用ゐ始めた。“理學”と“科學”と、二つながら Science の譯語であつて、二つとも用ゐられてゐる。之れについては國語學者が奮起して整理しなければならない。それをしないで、默視してゐる。——

明治の初め、先輩たちは Nebula を“星霧”と譯した。ところが、之れを知らない若い連中が、同じ原語を“星雲”と譯して、盛んに、ひろく用ゐるに至つた。此の場合にも、やはり國語學者は知らぬ顔である。

尤も、“理學”と“科學”との併立、又、“星霧”と“星雲”との併立——それ等が、他に少しも迷惑や妨害を與へない間は、それでも宜しい。しかし、今は既に多くの人々が惱んでゐる通り、“科學”と“化學”とは混雜して、相ひ冒し合つてゐる現状である。又、“星雲”は、近年 star-cloud といふ新原語の出現によつて誤解されんとしてゐる! だから、何とかしなければならぬ現状である。(未完)

新元素“エレクトルム”

S. Mohorovicic といふ人は最新の物理學説を用ゐて、陽電子と陰電子と各々一つづつから新しく一種の元素が出来ると假想し、之れを *electrum* と命名し、この種のものが太陽のコロナ中に存在するかも知れないと想像してゐる。しかし陽電子一つの壽命は極めて短かいのだから、此の *electrum* が生ずるためには非常に稀な場合を想像しなければならない。